失語症専用通所リハビリテーションの意義について

キーワード：失語症、小集団、集団訓練、余暇支援

知多郡東浦町
医療法人　昭新会　デイケアセンターフィロス
言語聴覚士　辻　博樹

【はじめに】

現在脳血管障害や事故の後遺症で失語症を呈する方は全国に 30 万人とも 50 万人とも言われている。また新たに年間約 3 万人の方が失語症になっているとも報告がある。失語症の方は外見からは障害がわかりにくく、まだまだ社会的な認知も低い。しかし、コミュニケーションという人間が社会生活をおくる上で欠かすことのできない部分に困難さを持つということは本人や家族、周囲の人々への影響の大きさは計り知れない。

失語症のリハビリテーションを担う言語聴覚士が国家資格になって 14 年が経過したがまだまだ失語症の方に十分なリハビリテーションが行われる環境が整っていないと感じる。回復期でのリハビリテーションにも制限が設けられ、退院と同時にリハビリが中止になってしまうことも多い。退院後在宅で言語リハビリテーションを続けようと思っても、医療保険での言語聴覚士の配属数に比し介護保険での配属は大幅に少なく言語リハビリテーションを行うことが難しい現状がある。

少しでも地域の失語症の方のよりどころになればと考え、当法人では平成 22 年 11 月よりコミュニケーションに困難さを持つ失語症の方専用の通所リハビリテーションを開設した。今回は開設から約 2 年の活動を通して活動報告を行うとともに、今回行ったアンケートよりサービスの必要性を強く感じたため報告する。

【失語症専用通所リハビリの概要】

毎週土曜日に定員 10 名、6-8 時間の 1 日利用でのサービスを提供している。スタッフは言語聴覚士を 1 名、介護、リハビリ、看護スタッフが交代で 2 名の計 3 名で行っている。活動として午前中は主に集団での言語訓練（重症度別は取り入れていない)、午後は余暇支援活動として外出したり、陶芸、調理など創作活動を行ったりしている。

実施内容が集団訓練であるため、個別リハ加算などリハビリについての加算は頂いていない。個別リハビリとして言語訓練を受けたい方には平日の通所リハにて 6-8 時間コースと 1-2 時間の短時間コースを設けている。

【集団訓練について】

集団での言語訓練を取り入れている最大の目的は同じ言葉で困難さを持つ人同士の交流である。失語症の方はコミュニケーションが取りにくくなる為、どうしても外出の機会が少なかったり、コミュニケーションに消極的になってしまったりするところが少なからず見られる。この障害を持っているのは一人ではない事、自分以外でも頑張っている人がいる事を再発見し、少しでも生活に前向きになって頂けたらと考えている。

重症度別のグループ分けを行っていないのは、各利用者様に役割を設けたいためである。より重度な方には軽度な方がコミュニケーションの助けを行うことにより役割が生まれ、

自己肯定感や自信につながる。小さなコミュニティーではあるが、体調不良などやむを得ない事由によって利用中止になった方以外は継続してご利用頂けている。

【活動報告】

現在利用者数は5名で重度の方2名、中等度の方1名、軽度の方2名の構成でサービス提供している（内男性4名、女性1名）。集団言語訓練でも余暇支援プログラムでも軽度の方が他の方の手助けを行って頂いている。また、重度でも出来ることを最大限発揮できるようアプローチを行い本人および周りの方への気づきを促すよう支援している。実際平日の通所リハと土曜日の失語デイ両方を利用されている方は、失語デイが少人数であることや、他の利用者様をサポートするという役割があることで、活動により主体性がみられ、さらにいきいきと利用されている。

余暇支援プログラムでは、外出や創作活動、レクリエーションを行っている。言語でのコミュニケーションに困難さがある方は実生活では自己表現の場が限られてくる。また、様々な楽しみ活動を通して自分の趣味や楽しみを再発見して頂きたいと考えている。利用中の作業や活動をなかなか自宅での活動に直結することは難しいが、外出することが増えた方、季節の行事を楽しみにされる方等生活に広がりが見える。創作活動となると、スタッフも含め真剣に「あーしよう、こーしよう」といい作品にするため苦心しながら楽しんでいる。

また利用者様同士のコミュニケーションが増加したように感じられる。お互いに言いにくかったり、言っていることが分かりにくかったりすることは多い。それでも自然発生的に会話が始まっていくのは同じ困難さを持っていることへの安心感や一緒に頑張っているという信頼感がコミュニケーションを促進させていると考えられる。

【利用者様アンケート】

平成25年1月31日時点でサービスを利用している利用者様、家族様を対象にアンケートを実施した。

（実施項目①何を媒介として当サービスを知ったか、②利用したきっかけ、③利用後の変化について）

【アンケート結果】

①のサービスの認知に関しては、全員の方がケアマネジャーを通してとの結果だった。

②の利用したきっかけについては、「言葉のリハビリを行うデイが無かったから」「他の人と触れ合う機会を持ってほしい」「色々と楽しそうだから」などである。③の利用後の変化については「言葉が出る機会が増えた」「家で自分のできることを行うようになった」「外出の機会が増加した」、「大きな変化はないが季節の行事を自宅で行うことがないので季節感が味わえてよい」「楽しんで行っている」などである。

【考察と展望】

介護保険を利用してのリハビリテーションを行う方は生活期、維持期であることが多い。特に脳血管疾患の場合大きな回復を見せるのは発症後約 1 年間と言われている。しかし、言語機能の回復は長期にわたることも報告されている。今回のアンケートで、言語機能の回復が顕著な方は少なかったが、生活の質の部分での本人様、ご家族の反応は大きかったように思われる。

利用者様すべての方が「ケアマネジャー」からの紹介で本事業所を知ったとの回答だった。事業の周知とともに失語症というまだまだ馴染みの少ない症状の勉強会など啓発活動を行うことでこの症状の困難さと、失語症専用通所リハの重要性を理解頂けると考える。

また、失語症専用通所リハという少し特殊なサービスということで、対象地域外からの問い合わせも多くみられる。しかし、現在は送迎の問題もあり地域外の方に対してはご家族での送迎が可能な方のみお受けしている。今後対象地域を見直すことも視野に入れで少しでも多くの方にご利用して頂きたいと考えている。

【おわりに】

失語症状がある方は「言葉の知らない外国に行くようなもの」と形容されることが多い。誰でも新しい集団に参加することだけでもチャレンジが必要になるがさらに「言葉の知らない外国に行って集団に参加する」となるとさらに尻込みするのは当然である。「地域のコミュニティーに参加する」や「通所サービスに行く」、など新しい集団に参加する以前に「昔からの友人に会う」ことだけでも大きなチャレンジが必要なのである。そのチャレンジのハードルを少しでも低くし社会参加へのはじめの一歩としての役割を担えたら幸いである。